

平成 24 年度

千葉大学先進科学プログラム入学者選考課題

課題 II-D 解答例

II-D 解説

人間探求コースの課題論述では、アドミッションポリシーに明記されているとおり、1) 論理的かつ定量的に現象を理解する能力、2) 実験的センス、3) 人間の心、生命、言語、行動、社会、文化についての関心について評価する。

出題意図

文化によって認知様式が異なることは、日々マスメディアなどで紹介されている。様々な違いを文化差という言葉で片付けることは容易であるが、そのような差がなぜ生じるのか（あるいは、生じているように見えるのか）といった疑問を持つことは実証的な人文科学を学ぶ上で重要である。本問題では、このような問題意識をもとに、自尊心および自己評価の文化差に関する実験・調査を紹介している。

問1：実験の方法や意図について理解できるか。

(1) 解答例

研究1のように、ローゼンバーグの質問項目に答えるという方法では、「自分で自分のことを自慢しているように思われたくない」などといった思いや、「日本人としては一般的にこう答えるべきだろう」といった社会からの期待を答える可能性があり、必ずしも回答者の日常の認識やそれに基づく行動を反映していないかもしれない。そこで、研究2では、本来の目的が分からない状況（参加者が、自己卑下かを測定されていることに気がつかない状況）を実験によって作りだし、文化における自己評価の違いを検討したと考えられる。

※これに関しては、問題文中に出てきた Heine et al. (2000) も同様の指摘をしている。

(2) 解答例

与えられた成績が妥当だと思えば、能力判断のために多くの検査結果を必要としないだろう。一方、自分の思っていた評価よりも低いといったように、与えられた結果が自分のイメージとは異なる場合は、結果を受け入れにくく、確信を得るためにより多くの成績を呈示することを求めるであろう。つまり、呈示個数がより多いことは、確信度が低いことと同じ意味（自尊心が高い）を持っていると考えられる。ただし、成績の呈示個数は、確信度の回答よりも、参加者が比較的意識せず反応しているという点では異なる。このように、どのような行動をとるのか、どのように感じているかを両方測定し、それらが同様の結果を示せば、より強固な結果になると考えたのだろう。

※いずれも、これ以外の解答であっても、論理的かつ説得的に論じられておれば、評価する。

※たとえば、何度も少し違うやり方で調査・実験することで、信頼性が高まる、といった解答もありうる。

※今回の設問の解答には直接関係ないが、図2に示された結果は、条件間で差が小さく、散らばりの情報も無いことから、ハイネらのような結論を出すことに疑問が出るかもしれない。統計的検定の結果は、カナダ人では条件間で有意差がなく、日本人では見られた。日本人と条件の交互作用も有意であったことから、ハイネらの結論は、一応担保されていると見るべきであろう。

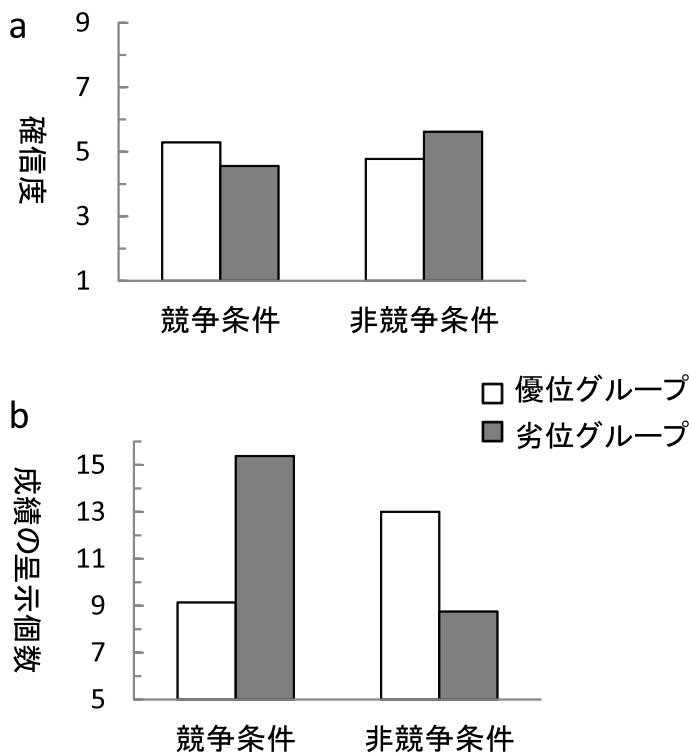
問2：問1と同様に実験の意図や方法を理解する力に加え、実験の結果について理解し、説明する能力を問う。
また説得的に説明するための図の作成センスを問う。

(1) 解答例

ハイネらの研究2では、日本人は自己卑下的（=<=> 自尊的）であることが示されたが、それは日頃から謙虚さなどを重んじるため、高い自己評価を抑制している可能性がある。したがって日本人の自己卑下的な態度は固定されたものではなく、成績の高さが報酬を決定するような競争場面では、その抑制を解いて自尊的な反応を示すような場面があるかもしれない。この可能性について、研究3では、競争的場面を実験的に設定して調べている。

※高田らの論文中には、日本人は「うち」と「そと」に対する態度が明確に異なり、普段は「そと」を意識しないが、一度意識すると、自己評価的が高くなる（自尊的になる）可能性を考察している。

(2) 解答例



※上図のようにグラフを作成すると、研究2の結果と比較しやすい。

非競争条件では、図2の日本人の結果が再現されており、確信度は劣位グループで高く、成績の呈示回数も優位グループで多い。しかし、競争条件では結果のパターンが逆転しており、確信度は優位グループで高く、成績の呈示回数は劣位グループで多い。これは図2のカナダ人パターンとよく似ており、競争場面では日本人も自尊心の高い傾向が示された。

※統計的な検定の結果は、確信度、成績の呈示個数でも、いずれも優位／劣位グループと競争／非競争条件の2要因の交互作用が有意であったことから、解答例に示したような結論は一応担保されている。

※ただし、成績の呈示個数に関しては、競争条件の優位・劣位グループ間に有意差があったもの、非競争条件のグループ間にはなかった。確信度については、両条件ともに優位・劣位グループ間の有意差があった。

※例年の試験同様、差が小さいこと、ちらばりの情報が無いこと、などを理由に結論を保留する趣旨の解答があれば、認める。ただし、理由が明確に論じられている必要がある。

問3：データの背景にある原因を想像しながら、データをもとに論理的に考察できるか。

解答例 A) 各側面の平均値を算出し、図3に示した。アメリカ人よりも日本人のほうが全般的に低い値を示している。しかし、図から、「他の多くの学生」よりも自分を高く評価し、自分自身よりも親友を高く評価するというパターンが日本とアメリカで共通していることがわかる。アメリカ人に対して日本人は卑下的であると結論づけるのは、一面的な見方に過ぎない。

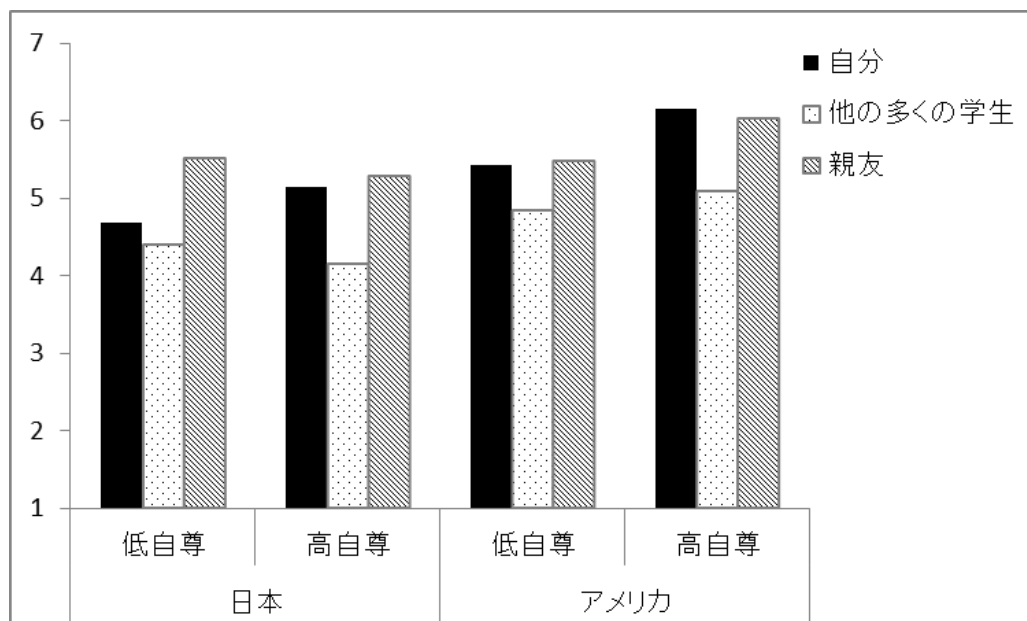


図3 全体的な自己評価（各側面の平均値）における文化と自尊心の影響

※そのほかにも、以下のような解答例がありうる（図は省略した）。

解答例 B) 項目ごとに自己と他の多くの人の評価の差得点、自己と親友の評価の差得点をそれぞれ算出すると、多くの側面で、他の多くの人よりも自分自身の評価を高く得点づけていることが分かる。一方、自己と親友との評価の差においては、自己と他の多くの人の評価の差に比べ、自分を低く評価している側面が多いことが分かる。この傾向は、日本人、特に低自尊心者において顕著である。その背景には、親友との関係を大切にする日本人の文化があるのかもしれない。

解答例 C) 各側面の重要度の得点を基に、比較的重要であると思っているかどうかで、側面を2つに分け、それぞれの平均値を算出すると、自尊心が低い日本人においても、重要度が高い側面では多くの他者よりも自

分を高く評価している傾向がある。自分にとって重要な側面では、日本人であっても自己卑下しないと考えられる。

問4：データと自分の人文科学的関心を結びつけながら、論理的に考察できるか。自分なりの調査や実験を企画する能力はあるか。

(1) 研究1, 研究2のデータは、日本人の自尊心や自己評価は低く、自己評価や自尊心を高めたいという動機がない可能性を示すものであった。しかしながら、研究3からは、日本人であっても場合によっては自己肯定的であること、研究4からは、一般的な他者に比べて自己評価を高く評価するという意味での自尊的な自己評価の傾向があること、及び、ある側面に着目すれば日本人とアメリカ人の差があまり認められないこと、などが分かった。

※問1～3でどのように答えたかによって左右されるので、その点を考慮する。

(2) 研究2・3では、認知能力についてポジティブもしくはネガティブな自己評価を受け入れられるかどうかを検討しているが、研究4のデータから、謙虚さや友人関係のテストを用いて、その結果を受け入れられるかどうか検討すれば、認知能力とは違った自己評価が示されるかもしれない。

研究2・3では、同じ条件であっても得点が異なっていた。研究4で一般的な他者と親友では評価がかなり異なることを加味すると、研究2と研究3では比較する対象が異なるために示された違いかもしれない。比較する対象が大学の平均とした場合でも研究3の結果が追証されるか検討する必要がある。

※その他挙げられる問題点としては、尺度における翻訳の問題、抽出したサンプルの問題（対象とした大学間の能力の違い、参加者の世代）などが考えられる。